

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

本編集後記を依頼されたとき、理化学研究所の小保方氏から STAP 細胞作成について、NATURE 誌に報告されたことが記者発表され、日本中が大騒ぎであった。ただ、残念ながらその後の雲行きは怪しい。いずれにせよ、STAP 細胞そのものについては知るよしもないが、真実が明らかにされることがすべてであろう。

さて、小生が本誌編集委員の末席に加えていただいたのは、昨年9月からである。初めて委員会に出席させていただいた日のことは鮮明に記憶している。各分野別に投稿された論文について担当者からの PRESENTATION のあと、討論がなされた。全国から選任された約 30 名の消化器外科の専門家の先生方から、多くの問題点や訂正事項が示され、時にその討議は熱く、採択における妥協は許さない、そんな雰囲気であふれていた。それは、“消化器外科邦文誌の最高峰である”という、矜持と責任感によるのだと思う。

実はその中で、少しばかり失望感にも似た違和感をおぼえていた。

それは、投稿論文のレベルと編集委員会の熱意との微妙なズレであった。本誌に投稿される論文のほとんどが「症例報告」で、そしてその第一著者は、これからの日本を支えることになる若手外科医であろう。おそらく、仕事を始めて貴重な症例を経験し、論文にすべく初めて本誌に投稿したものも多くいる。一つの症例をまとめることはこれからの外科医生活において、重要な意味を持つ。しかしながら、質の低い論文が少なからずある。これは、症例そのものの選択というよりも、“本文が十分に練れていない”、“症例呈示に示された内容と提示された画像が異なる”、“文献検索が不十分である”、などの、ある種指導者側の手抜きともいえる不十分さに起因する。

確かに昨今の医療現場は、外科医不足による厳しい状況にあることは否めない。ただ、若手外科医にとっての症例報告の作成は、科学的考察力をもつ外科医への第一歩である。冒頭の STAP 細胞の論文問題についても、研究結果の真実そのものより、論文作成の過程に問題があったのかもしれない。そのためには、指導者の丹念なチェックと熱意あふれる指導は不可欠である。智力の高い外科医育成のためにも、現場の指導医の今一步の踏ん張りに期待したい。

そして、いつの日か、あの日の委員会で感じた“違和感”がなくなる日を強く望む。

(永野 浩昭)

2014年4月1日